

<新刊紹介>成清良孝著『廣松渉における人間の研究-ほかに『俳句無情』など十三編-』

中島, 義彦 / ナカジマ, ヨシヒコ

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

55

(開始ページ / Start Page)

98

(終了ページ / End Page)

100

(発行年 / Year)

1997-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019943>

完全に「自己完結した世界」でなければならず、作者の意志に「私」さえも介在してはならないというもの。その具体的手段である「方法的側面」は、「現実の出来事」の組合せによって構成し、作者の恣意的創作を極力排除する、自然主義の原理を取り入れながらも全く新しい創作手法すなわち「則天去私の手法」の発明と考察する。

紙数の都合上、本書中、特に著者独特の考察と思われた部分について拙い紹介をした。

(よしだ しん・一九九五年修士卒)

▽一九九六年リール出版 七〇〇四円

△著者 法学部、文学部卒

成清良孝著

『廣松渉における人間の研究
—ほかに『俳句無情』など十三編—』

中島 義彦

成清良孝氏は、教職歴四十三年という長きにわたって教育現場に身を置き、折り折りにあまたの創作と辛口の批評をものせられてきた。このことは斯界にあっては夙に知られているところであるが、この度新たに標記の著書を上梓された。筆者は編集部より氏の著作の書評を依頼されたが、廣松渉という「稀代の哲学者」(成清氏)を扱った作品を論ずることなど、あまりにおおげないことではあり、とうていその任でもなく、単にその読後感を記す程度のものでしかないことを初めに断っておかねばならない。

氏の『廣松渉における人間—ほかに『俳句無情』など十三編—』(以下『廣松』と

略称)はおおよそ四つの部分で構成されている。

- (一) 『俳句無情』
- (二) 教育現場もの
- (三) 同窓会もの
- (四) 『廣松渉における人間の研究』

前記三つが創作で(四)のみノンフィクションの形式をとっている。氏の作品はいずれが軽妙な筆致で描かれ、それぞれに面白く読まれるが、察するに著者が最も力をこめて執筆されたと思われる『廣松』から書評として説くのがやはり事の順序というものであろう。

『廣松』は著者と郷里(福岡県柳川市)を同じくし、福岡県立伝習館中学(創立

約一七〇年の伝統校)の三年後輩にあたる廣松渉への限りない愛惜をこめて、氏自身の交友及び多くの取材と調査にもとづいて、人間廣松渉の素顔に迫ろうとした作品である。ただ「愛惜」といつても、それは一方的な思い込みや鼻筋への異様な情熱とは全く無縁なものであつてそこには決して激したものはない。『廣松』は一見私小説風な「訃報」から書き出されるが、著者の廣松へのスタンスは次のような一節によくあらわれている。

古い学校のことだから、戦前だけでも、確かに多くの人材を輩出している。わたしの狭い視野の範囲でも、たちどころに何人かをあげることができる。ただ、わたしは社会的業績をあげたり、名声を博したりした人たちに対して、おもねるように擦り寄り、「伝習館の誇り」とか、手垢てあかのついた齒の浮く紋切型で持ち上げる気にはとてもなれない。

わたしは……マルクス主義研究の哲学者として桁はずれにスケールの大きな仕事をしてきた廣松渉の存在を多少なりとも知ってもらいたかったのだ。

それに反体制の知職人に対しては、それがどんなに世界的な業績をあげていようと、決して認めようとしなない一部の伝習館人脈の救いがたい頑迷固陋ころうな保守体質へのいらだちもあつた。

次いで「早熟な少年期」では後年の哲学者廣松渉の思想形成がどのようなものであつたかを明らかにしていこうとする。とりわけ詩人松永伍一による廣松渉の回想(昭和六十三年四月『松永伍一全景』は実に興味深い。

三つ年下の少年廣松渉(現東大教授)をおおるべき秀才と見て、畏敬する。周囲の誰よりもまぶしい存在であつた。「自分はちがうタイプの人間になる」と決意させた恩人である。

また廣松が伝習館中学三年の頃、反共キャンペーンの講演にきた佐野学に廣松がするどく反論、佐野学に講演後「こんな頭脳明晰な中学生は見たことがない」と言わしめた話を先の松永伍一が「東京新聞」(一九九四年六月二十二日)に伝えていることを著者は紹介しているが、それよりも昭和二十二年十月、創刊されたばかりの『学舎鐘』(福岡県山門郡内の

男女中等学校合同文芸誌)に廣松が中學傳習館第二學年社會科學研究會員として投稿した「社會科學と自然科學」を著者が拾い上げた功績は大きい。むしろこれは廣松の早熟さを証明するものであるが、同時に廣松渉の思想形成の一端を垣間見せるものとして重要視されるにちがいない。

しかしそれにしてもこの早熟さはどこから来たのか。著者はその達意な筆でよく廣松の家庭環境にも言及しているが、父親に死なれたとは言え、改造社版『マルクス・エンゲルス全集』を秘匿していたこと、母親禮子が戦後早くから赤旗分局に出入りしていた日本共産黨員であつたこと、加えて一九五〇年反戦ビラ配布で退学処分になつた際、母親は「うちの子は何も悪いことはしていないではありませんか。戦争反対のびらを撒くことが、どうして謹慎処分の対象になるのですか。うちの子を謹慎処分になさるのでしたら、先生方は戦争に賛成なさるのですね。戦争という人類のいまましい犯罪行為に心情的に加担なさるのですね。そうじゃありませんか」と猛烈な抗議をし

たという。一方で中学入学の頃から高校生
の頃まで、内ポケットにいつも刃物を
忍ばせ、その「粗暴な振舞」に母親も手
を焼いて、宮川武寿・龍昇吉らが紹介さ
れたという。評者とすれば多感な少年期
に母親禮子の影響は少なからぬものがあ
つたと思うのが、著者の文章からはそこ
がなかなか伝わって来ない。もともとこの
あたりを追求するには、日本共産党の分
裂・朝鮮戦争勃発という一九五〇年とい
う時代を背景に考えなければならぬとい
うことなのだろう。ほかに廣松の律儀
さ、東大助教授就任のいきさつ、高石邦
男元文部次官、今なお職業革命家であり
続けるSのことなど、読みどころは随所
にあるが、いづれにして哲学者廣松涉研
究には、その全業績を集大成した『廣松
涉集』（全十六巻、岩波書店）はもとより
本書も少なからぬ寄与するものであろう。
紙幅が尽きたが、一、二紹介しておく。
『俳句無情』は、俳人および俳壇をめぐる
人間模様と高浜虚子の俗物性を衝いてよ
く著者の本領を発揮している。また痛快
読物は「エキセントリックな性格」で「救
いがたい教条主義」の持ち主石田れい子

なる人物を描いた『ある女教員の場合』
である。なお高校教師石田れい子のモデ
ルM女史は都議選に立候補、当選。やが
て国政選挙にもうって出るが、見事に落
選。学校現場のおぞましい退廃を赤裸々
に描き出している。（因みにこの作品の末
尾には日本の現在の政治意識の低さが星
川なる人物の口を通して語られている）
以上、蕪雑な言辞を弄してきたが、何
はともあれ無類に面白い点で一読をす
めたい。

（なかしま よしひこ・一九七一年卒）

▽一竹書房・二、〇〇〇円

△著者―一九五六年卒

